

彙報

本年度哲學科卒業論文題目

哲學專攻

△印は撰科生徒
○印は委託學生

新カント學派ト經驗主義

カントの物自體

シエリングの象徴思想

印度哲學史專攻

支那華嚴史概説

龍樹の學説

女人成佛思想の研究

維摩經の研究

印度佛教に於ける大乘戒律思想の研究

親鸞之研究

起信思想發展の概観

支那に於ける達磨渡來以前の禪

支那哲學史專攻

支那先秦時代の婚姻に就きて

心理學專攻

精神物理的方法に就いて

倫理學專攻

スピノザ

淨土眞宗倫理

日本古代民の道德思想に就て(主として記紀萬葉に現はれたる)

カント道德學の哲學的基礎一般

肉體と道德

教育學教授法專攻

教育の社會心理の基礎

シユライエルマッヘル教育論

教育の概念及理想に就いて

國家的教育

教育理想としての人文主義及實科主義に就いて

催眠術と教育

思考と教育

環境論より教育論へ

美學美術史專攻

滑稽に就いて

パツハ、ベエトオフエン及パレストリナ

親鸞の宗教意識

曹洞宗教理と其の運用論

Augustineの研究

社會學專攻

社會的慣習の原理の研究

徳川時代に於ける町人精神及其の成立に就いて

我國の田園の社會學的研究

谷村 又郎

世良 壽男

本多 莞爾

祝 光次郎

伊藤 猷典

堤 隆

楠引友三郎

廣兼來藏

△村上瑚磨雄

△西 基一

△山 樹儀重

吉田 孫一

△安 藤弘

西野 道元

小島 石龍

△清水 曉昇

巖 西眞乘

銅 直男

△森 賢隆

飯島 象太郎

武内 了温

岩井 勝二郎

浦川 源吾

藤 亮一

佐々木 俊隨

西 山 馨

手島 文倉

宮城 信雅

杉 原 巽

△龍 溪玄深

○後 藤 亮一

市田 勝道

河 瀨 憲治

染 村 龜鶴

鮎 瀬 春彦

△印は撰科生徒

○印は委託學生

哲學倫理學會

五月四日午後七時より學生集會所にて開會。

カントの最高善とフリーマートの概念に就いて

世良 壽 男君

の講演あり。來會者藤井教授を初め小野寺、野崎、尾生、西原諸學士及び學生十名。講演後藤井、野崎、鯖瀬、松原等諸士の質問續出して興味津々盡きざるの會合なりき。西田、朝永兩教授は病氣にて欠席せり。

印度哲學會 例會

二月二十七日(火)午後六時半より文科九教室に於て開催。

○瓔珞經論

宮城 信 雅氏

○我國悉曇の傳來

松本 教、授

宮城氏は龍樹思想の立脚地より瓔珞經を研究し或は華嚴經との比較を試み或は戒律思想の上より觀察し本經の内容及び成立等を概論せられたり。

松本教授の分は「藝文」本年度第五號に於て詳細に發表せられたり、就て見らるべし。

來會者講演者の外に寺本講師、羽溪、赤松、宇野、原、海野、鳥越、本田の諸學士、學生その他合して三十名、十時半閉會。

三月十六日(金)午後六時半より文科七教室に於て開催。

○本邦華嚴之學系

市田 勝 道氏

○文殊思想發展論

手島 文 倉 氏

○梵本法華經新出異本

本 田 文 學 士

先づ市田氏は本邦華嚴の學系に對する從來の學說に疑義を挟み新らしき學系施設を論ぜられ、次に手島氏は菩薩思想を四分し、その一々に文殊思想發展の階段を當て符め、その思想變遷の次第に應じて諸種の文殊經典成立の前後を推論し、最後に彌陀彌勒等の淨土に對し文殊淨土の思想に論及せられたり、明快にして論理頗る徹底せる研究發表たるを感じぬ。最後に本田學士は最近東方土爾其斯垣に於て發掘せられたる諸種の梵語佛典中に法華一經の斷片に就て法華經の英佛和漢諸譯本及尼波羅傳來の梵本等との比較研究を試みその結果該新出本が特に羅什譯妙法華經と最も密接なる關係を有するものなる事を説き、その本文的價值に至りては比較的優秀なる位置を占むるものなりといふを得べしと論結せり。

來會者講演者の外に松本教授、日野、齋藤、寺本各講師、羽溪、赤松、鳥越の諸學士、學生その他合して二十名、十一時半散會。

宗教研究會大會

五月十二日(土)午後二時より文科第七教室に於て開催。

○宗教に於ける人格的態度 文學士 宇野 圓 空氏

○初期基督教と其美術 文學士 濱 田 耕 作氏

○摩登伽經に就て 文學博士 榎 亮三 郎氏

宇野學士は内外諸學者の學說を紹介批評しつゝ、宗教的對象とし

て吾人の認むべきものは唯人格的たるに止まるにあらずして非人格的のものも亦その存在を認めざるべからずと一々興味ある事實を擧げて論述せられ。次に濱田學士は紀元第一世紀の終頃より六世紀の終頃に互り所謂ゴシック美術成立以前の基督教美術に就てその技術が尙頗る幼稚なるに拘らずしかもその溢るゝ如き基督教的精神を示さんとせる煩悶の表現に多大の價値ありとせられ、墳墓、寺院、彫刻、繪畫の一々に就て多趣なる紹介を試みられ、特に Otaomb 及び Basiles 等に就ては大に明快にして興味深き論評を發表せられ、東洋美術との關係にも及ばれ感興頗る大なるものありき。最後に樺博士はサマリヤと摩登伽女との比較より摩登伽經内容の詳細なる紹介に進み、その思想を或は文學或は言語に或は宗教學乃至考證學等あらゆる方面より觀察批評せられ、佛典研究上新方面開拓の必要及方法にも論及し、簡單に本經成立の考證をも試みられ本經を以て第三世紀頃の印度の學問、思想を傳へるものと見るを得べしと述べられたり。(尙本大會講演は退て「宗教研究」誌上に掲載せらるゝ筈)。

來會者講演者の外に松本、坂口、深田の諸教授、寺本講師、羽溪、赤松、藤井、原、鳥越、檜崎、中川、高藏、本田の諸學士、その他二百餘名、六時閉會。

尙講演後學生集會所に於て晚餐會を開き論談數時、九時散會。

ロツツエ誕生第百年記念

本年五月二十一日はヘルマン・ロツツエの誕生第百年記念日に相當する。ロツツエは固よりカントの様に哲學思想の根本的轉廻を仕

送げた獨創的大思想家でもなく、又たヘーゲルの様に神秘的深味と、嚴正細密な概念的思索と、一切を包容する大體系組織とを兼ねた偉大な哲學の大成者でもないが、併しヘーゲル及びヘルバート以後に於ては、最偉大な思想家であり、殊に獨逸哲學の最盛期と哲學復興の現代との橋梁となつて前を承けて後を起したといふ點に於て今日の吾々は彼に重要な意義を認めねばならぬと思ふ。吾々は斯る趣旨よりして此記念目を機會として同人合作の「ロツツエ」を公刊して彼れに獻ぐると共に、之より得たる收益を以て創立日尙ほ淺き吾京都哲學會の基礎の固くする料とすることとした。

尙ほ去る五月二十日に開かれた京都哲學會春期公開講演會に於ては半ばロツツエ誕生紀念の意味を兼ねて左の講演が有つた。

ロツツエの時代

文學博士 朝永三十郎

感情の心理

文學士 野上俊夫

右の外文學士錦田義富君の「ロツツエの妥當に就て」の講演がある豫定であつたが同君に不得已故障が有つて之れを缺いたのは遺憾であつた。

新著紹介

思潮 創刊號

「思潮」は阿部次郎氏などによつて先月から創刊せられた雜誌である。此の雜誌の主意は發刊の辭に於ても窺はれるやうに、現代文明の批評と優れたる文化の建設とに廣く大なる基礎を築かんと